

アイルランド英語 (Hiberno-English) における 受動構文について

小 川 勉

0 はじめに

アイルランドで使われている英語には、アイルランドの母語であるアイルランド語を基層構造とし、ブリテン島からもたらされた英語の構造に影響を与えた構文があることが報告されている。

本稿ではまず、アイルランド語とアイルランド英語における受動構文 (Passive Construction) の統語的特徴について考察を行う。次に、アイルランド語話者がアイルランド英語の受動構文を生成するために必要な言語知識及び生成のしくみについて考察を行う。

1 アイルランド語の受動構文

先行研究において、標準英語とは異なる特徴を示すアイルランド英語の分布および内部構造について主に考察が行われてきている。本稿は、これまでほとんど考察の対象とされていないアイルランド英語の受動構文について考察を行うものである。

アイルランド語の受動構文はアイルランド英語および標準英語とは異なる統語構造をもっている。アイルランド語の受動構文について分析を行っている先行研究は多くはないが、その中で Hickey (2007) は以下の例を用いて分析を行っている。

- (1) a. Tá an obair déanta.
[is the work done-PP]
'The work has been done.'
- b. Tá an obair déanta agam.
[is the work done-PP at-me]
'The work has been done by me.'
- c. Tá an obair déanta acu.

[is the work done at-them]

HE: 'They have the work done.'

StE: 'They have finished the work.'

(HE = Hiberno-English, StE = standard English)

これらの例において、アイルランド語の *agam* と *acu* はそれぞれ *ag* の前置詞的代名詞の一人称単数形、三人称複数形であり、標準英語の *at me* と *at them* に対応すると分析されている。

Hickey (2007) が、(1b)はアイルランド英語における「目的語と過去分詞を伴う結果完了」(resultative perfective with O + PP word order) (1c)と同じ構造をもち、受動文の解釈は適切な文脈で得られると述べていることは注目に値する。これは、一つの構文(1b)が文脈により二つの意味をもつことになるからである。本稿において(1a)を *be* 受動構文 (*be passive*)、(1b)を *have* 受動構文 (*have passive*) と呼ぶことにする。Hickey (2007) において分析されている resultative perfective with O + PP word order は、Filppula (1999) で分析されている「目的語中間完了」('medial-object' perfect (MOP)) に対応し、同じ特徴をもっているといえるので(1c)を MOP と呼ぶことにする。

Hickey (2007) は resultative perfective with O + PP word order について以下の特徴を挙げている。

possible convergence, primarily transfer from Irish
grammatical features of both northern and southern Irish English

(1a)と(1b)の形式的相違点は *agam* の有無のみであるが、両者にはアイルランド語話者がかつ状況認識が反映されていることがわかる。ある特定の状況において動詞により遂行される行為を引き起こすものとその行為の影響を被るものが関与する場合、話者がどのような状況を認識し、そこでどのような要素を言語化するかにより使用される表現形式(統語構造)が決定される。行為の影響を被るものとして「主題／対象」(theme)のみが認識される場合は表現形式(1a)が選択される。一方、themeの認識に加え、行為を引き起こすものとして「動作主／行為者」(agent)も認識される場合は表現形式(1c)が選択される。

(1b)と(1c)は、agentの意味役割をもつ前置詞句をとともにもっている。しかしながら、アイルランド語に対応するアイルランド英語および標準英語の主語に違いがみ

られる。(1b)では行為の影響を被るものとして *theme* の意味役割をもつ *the work* に視点が置かれ、主語として機能している。一方、(1c)では *agent* の意味役割をもつ *they* に視点が置かれ、主語として機能している。これは興味深い相違点である。前置詞句内の代名詞が単数 *me* であるか複数 *them* であるかの違いがあるが、これは問題とはならない。

意味役割とは、名詞句や前置詞句が1つの文の中で動詞に対して果たしている意味的な役割である。本分析で用いる意味役割は以下のとおりである。

意味役割

動作主／行為者 (Agent) : 行為を引き起こすもの

主題／対象 (Theme) : ある行為の影響を被るもの

場所 (Locative) : 状態が成り立つ場所

また、Pietsch (2010) は受動文の例として以下を提示している。

- (2) a. Tá bád agam.
 [is boat at.me]
 'I have a boat.'
- b. Tá an bád diolta.
 [is the boat sold]
 'The boat is sold.'
- c. Tá an bád diolta agam.
 [is the boat sold at.me]
 'I have sold the boat.'

Pietsch(2010)は(2a)を *locative possessive construction*、(2b)を *statal passive construction*、(2c)を *passival perfect construction* と分類している。

2 受動構文の統語構造

第1節での分析に基づきアイルランド語において「受動」の機能をもつ構文について考察する。アイルランド語話者がアイルランド英語および標準英語を習得する際には、両言語の相違点に注意し、それぞれの言語についての知識を意識する必要がある。

まず、基本語順についての知識を比較する。アイルランド語は「動詞+主語+目的語 (VSO)」の語順をとる言語であり、アイルランド英語および標準英語は「主語+動詞+目的語 (SVO)」の語順をとる言語である。

(3) Irish:	V	S	O
HE, StE:	S	V	O

次に、受動構文についての知識を比較する。アイルランド語の受動構文は基本の VSO 語順に変更を加えず、*tá* (= *is*) の追加と動詞の過去分詞形を用いて生成される。一方、標準英語の受動構文は対応する能動構文の主語と目的語の構造的変換位置を変換し、追加の *be* 動詞と動詞の過去分詞形を用いると同時に、任意の操作として前置詞 *by* とこれに後続する名詞句により *agent* を付加することにより生成される。

アイルランド語の (1a)、(1b) および (1c) を再掲する。

- (1a) Tá an obair déanta.
 [is the work done-PP]
 'The work has been done.'
- (1b) Tá an obair déanta agam.
 [is the work done-PP]
 'The work has been done by me.'
- (1c) Tá an obair déanta acu.
 [is the work done at-them]
 IE: 'They have the work done.'
 StE: 'They have finished the work.'

それぞれに対応する構造及び意味役割は (4a)、(4b) および (4c) である。

- (4a) Irish: *tá* - NP<theme> - V-p.p.
 NP<theme> - HAVE been V-pp.
- (4b) Irish: *tá* - NP<theme> - V-p.p. - **ag NP<location>**
 NP<theme> - HAVE been V-pp. - by NP<**agent**>
- (4c) Irish: *tá* - NP<theme> - V-p.p. - **ag NP<location>**
 HE: NP<**agent**> - HAVE - NP<theme> - V-pp.
 StE: NP<**agent**> - HAVE - V-p.p. - NP<theme>

2. 1

アイルランド語話者がアイルランド英語および標準英語を用いて *be passive* (4a)、*have passive* (4b)、および関連する MOP (4c) を生成する過程でそれぞれの言語のどのような知識を用いるのかについて検討する。

アイルランド語の受動構文に対応するアイルランド英語および標準英語の1つ目のパターンとして *be passive* (1a) について考察する。アイルランド語話者がアイルランド語における受動文の統語構造には変更を加えず、表層の単語レベルで標準英語の単語に置き換えた場合、(5)の連鎖が生成される。

(5) HE, StE: *is the work<theme> done

(5)の非文法性は、は「定形文において明示的主語が動詞に先行する位置に生じることが必要である」という拡大投射理論に反しているからである。

The work<theme> は、受動相に用いられる *be* 動詞と共に起る過去分詞形が格情報を付与する能力をもたないために、この構造位置にと留まるかぎり、「音声形式をもつ名詞句は格に関する情報をもつ必要がある」という格フィルターに反しているからである。

この2つの必要条件を充たす構造を生成するために、文中の名詞句の内、主語に近い要素動詞 *the work<them>* が *is* に先行する位置に移動し、その構造的な位置において「主格」をもつことになる。

(6) HE, StE: the work<theme> is done

この表現が用いられる文脈を反映して、現在時制に完了相が付加されて(7)が生成される。

(7) HE, StE: The work<theme> has been done.

要約すると、アイルランド語の構文に対応するアイルランド英語および標準英語の構文を生成するために次の2つの操作が必要となる。

- (8) i. 格情報をもたない NP<theme> を主語位置に移動させる。
- ii. 文脈により現在時制に完了相を付加する。

2. 2

アイルランド語の受動構文に対応するアイルランド英語および標準英語の2つ目のパターンとして *have passive* (1b) について考察する。アイルランド語話者がアイルランド語における受動文の統語構造には変更を加えず、表層の単語レベルで標準英語の単語に置き換えた場合、(9)の連鎖が生成される。生成過程での非文法性の説明は1つ目のパターンと大部分同じ理由による。

(9) HE, StE: *is the work<theme> done at me<location>

(9)の非文法性は、「定形文において明示的主語が動詞に先行する位置に生じることが必要である」という拡大投射理論に反しているからである。

The work<theme> は、受動相に用いられる *be* 動詞と共起する過去分詞形が格情報を付与する能力をもたないために、この構造位置にと留まるかぎり、「音声形式をもつ名詞句は格に関する情報をもつ必要がある」という格フィルターに反しているからである。

この2つの必要条件を充たす構造を生成するために、文中の名詞句の内、主語に近い要素動詞 *the work<them>* が *is* に先行する位置に移動し、その構造的位置において「主格」をもつことになる。

(10) HE, StE: *the work<theme> is done at me<locatin>

定形文の主語の位置が明示的名詞句により占められているにもかかわらず、(10)は非文法的連鎖のままである。この非文法性は、標準英語の受動文において *agent* は *by* とこれに後続し、*agent* の意味役割をもつ名詞句により表現される必要があるためである。

この必要性を充たすために、この連鎖に現れる *at me<location>* を *by me<agent>* に変換する操作が行われる。

(11) HE, StE: the work<theme> is done by me<agent>

この表現が用いられる文脈を反映して、現在時制に完了相が付加されて(12)が生成される。

(12) HE, StE: The work<theme> has been done by me<agent>.

要約すると、アイルランド語の構文に対応するアイルランド英語および標準英語の構文を生成するために次の3つの操作が必要となる。

- (13) i. 格情報をもたない NP<theme> を主語位置に移動させる。
- ii. *at* + NP<location> から *by* + NP<agent> へ意味役割を変換する。
- iii. 文脈により現在時制に完了相を付加する。

2. 3

アイルランド語の受動構文に関連する構文 MOP について考察する。アイルランド語話者がアイルランド語における受動文の統語構造には変更を加えず、単語レベルで標準英語の単語に置き換えた場合 (14) の連鎖が生成される。生成過程での非文法性の説明は1つ目のパターンと大部分同じ理由による。

- (14) HE, StE: *is the work<theme> done at me<location>

標準英語の能動文を生成するためには受動相を示す助動詞 BE を完了相を示す助動詞 HAVE に変換する必要がある。

- (15) HE, StE: *have the work<theme> done at me<location>

(15) の非文法性は、「定形文において明示の主語が動詞に先行する位置に生じることが必要である」という拡大投射理論に反しているからである。

完了相に用いられる *have* 動詞と共起する過去分詞形が格情報を付与する能力もち、*the work*<theme> に目的格 (対格とも呼ばれる) を付与するため、*the work* はこの構造位置に留まることが可能である。

拡大投射理論の必要条件を充たす構造を生成するためには、その位置に留まることができる要素 *the work*<them> 以外の名詞句により主語を明示する必要がある。ここでは前置詞句の目的語 *me* がその候補となる。前置詞がもつ意味役割は、その前置詞が支配する目的語名詞句に浸透すると仮定されている。この仮定によれば、目的語代名詞 *me* は前置詞 *at* から浸透している意味役割 *location* をもっていると仮定できる。

- (16) HE, StE: *me<location> have the work<theme> done

(16) の非文法性は、標準英語において主語は主格をもつ名詞句により表現される必要

があるためである。この必要性を充たすために、この連鎖に現れる *me*<location> を *I*<location> に変換する操作が行われる。

(17) HE, StE: **I*<location> have the work<theme> done

(17) の非文法性はこの文において主語がもつべき意味役割が *agent* ではなく *location* であることによる。主語の意味役割を適切な *agent* に変換したものが (18) である。

(18) HE: *I*<agent> have the work<theme> done
StE: **I*<agent> have the work<theme> done

さらに、(18) に対応する適格な標準英語を生成するため、統語構造の変換、すなわち「目的語 + 動詞」の語順を「動詞 + 目的語」に変換する必要がある。

(19) StE: *I*<agent> have done the work<theme>.

要約すると、アイルランド語の構文に対応するアイルランド英語の構文を生成するために次の3つの操作が必要となる。

- (20) i. 受動相から完了相に相の変換を行う。具体的には助動詞を BE から HAVE に変更する。
- ii. *location* の意味役割をもつ前置詞 *at* の目的語を主語位置に移動させる。
- iii. 主語名詞句を主格に変換する。
- iv. 主語の意味役割を *location* から *agent* に変換する。

さらに、対応する標準英語の構文を生成するために次の操作が追加が必要となる。

- (20) v. 「動詞 + 目的語」の語順に変換する。

3 アイルランド英語の完了構文

3. 1

アイルランド英語の完了相をもつ構文が果たす機能は、アイルランド英語において複数の異なる統語構造によって表現される。

Filppula (1999) は、以下の下位区分を提案している。

- (21)
- (a) the 'indefinite anterior' perfect (IAP)
e.g. Were you ever in Kenmare?
'Have you ever been ... ?'
 - (b) the after perfect (AFP)
e.g. You're after ruinin' me.
'You have just ruined me.'
 - (c) the 'medial-object' perfect (MOP)
e.g. I have it forgot.
'I have forgotten it.'
 - (d) the *be* perfect (BEP)
e.g. All the tourists are gone back now.
 - (e) the 'extended-now' perfect (ENP)
e.g. I'm not in this {caravan} long.
'I haven't been ...'
 - (f) the 'standard' have perfect
e.g. And we haven't seen one for years round here.

前節で考察を行った「目的語 + 動詞」の連鎖をもつ MOP を再掲する。

- (18) HE: I<agent> have the work<theme> done.

ここで、MOP の主語 *I* が担う意味役割について検討する必要がある。アイルランド語話者は *I have the work done.* の文における主語にどのような意味役割を認めているのであろうか？ここでは2つの可能性を示唆するにとどめる。

最初は、主語 *I* の意味役割を *location* のままで述部が表す状況を認識している可能性である。この場合、主語 *I* という心理的空間の場所において何が起きているかが認識される (22a)。

次は、主語 *I* の意味役割を *location* から *agent* に変換している可能性である。この場合、主語 *I* が *agent* となり何を行うかが認識される (22b)。

(22) MOP

a. **NP<location>** - have - *NP<theme>* - V-p.p.

b. **NP<agent>** - have - *NP<theme>* - V-p.p.

両者の相違点は、表層構造における主語が担う意味役割が異なる点である。(22a)の主語は *location* の意味役割をもち、(22b)の主語は *agent* の意味役割をもっている。

3. 2

Filppula (1999) はその分析の中で、MOP と表層構造 (語順) は同じであるが異なった意味をもつ構文 (23-25) を示し、両者を区別する必要があると述べている。

(23) He had it done. Visser (1963-73: 2190)

'He got (caused) it (to be) done by someone else.'

(23) は使役の読みをもち、Visser (1963) は *indirect consecution*、そして Harris (1984) は *indirect passive* と呼んでいる。

(24) The pilot had a leg broken. Kirchner (1952: 396)

(25) The neutrals have their ships destroyed. Kirchner (1952: 396)

(24, 25) の構文を Kirchner は *have-passive*、O. Curme は *passive of experience*、そして V. Mathesius は *possessive passive* と呼んでいる。

Filppula (1999) は MOP と (23-25) との構造的相違点を以下のように述べている。アイルランド英語の MOP は表層主語 (1 番目の主語) と動詞句が示す動作を行う主語 (2 番目の主語) は同一指示である。一方、(6-8) の表層主語は (ほとんどの場合明示されない) 2 番目の主語とは同一指示ではない。この分析から、(23-25) と MOP は表層構造 (語順) が同じであるが、MOP とは異なる機能をもっているといえる。

本稿では、(23-25) の主語が担う意味役割は *agent* ではなく *location* であると提案する。(23) においては、*he* という心理的空間の場所において *it (to) be done by someone else* が起きたと認識できる。使役の意味はないが (24) において、*the pilot* という心理的空間の場所において *a leg (to) be broken* が起きたと認識できる。(25) についても同様の分析を行うことができる¹⁾。

4. 受動文について (続き)

第2節においてアイルランドの受動文に使われる *ag* + NP について分析を行った。まずはこの *ag* について以下補足する。

ミホール・オシール (2006) 『アイルランド語文法：コシュ・アーリゲ方言』によると、*ag* の基本的な意味は「～に (場所)」であり、(26) は「カーチが門のところにいる。」という意味をもっていると説明されている。

(26) Tá Cáit ag an ngeata.

そして、この *ag* に「人」を表す表現が付加されると、「もっている」を意味するが、「資質をもっている」、つまり「能力をもっている」から「できる」、「知識をもっている」などの意味に拡張されることができると説明されている。

この補足により、*ag* + NP の名詞句が「人」を表す表現である場合、基本的な「物理的空間の」場所に加え、派生的に「心理的空間の」場所の意味 (役割) をもつことができるといえる。

アイルランド語話者がアイルランド英語の受動文を生成する際に、この *ag* + NP (人) を *by* + NP (人) に変換することは第2節ですでに述べている。本節では、*ag* + NP と *by* + NP の2つの中間的構造、すなわち、*at* + NP が受動文に現れる可能性について考察する。

アイルランド英語で書かれた文学作品等のコーパスにおいて *at* + NP をもつ受動文のデータは以下のとおりである。

(27)

a. “I am rejoiced *at* your coming, O my good friend Fergus,” said Cuchulain.

(A.H. Leahy (undated) Heroic Romances of Ireland)

b. When many, full of love and gratitude to the teacher of salvation, their spiritual father, freely offered him gifts, and pious women offered their ornaments, Patrick, although the donors were at first offended *at* it, in order to avoid all evil report, declined everything.

(Anonymous (1851) The Annual Monitor for 1851)

c. Here certainly was another of those measures which without any crime in the people of Ireland was levelled *at* one of their most valuable privileges.

(Anonymous (undated) The Causes of the Rebellion in Ireland Disclosed)

d. Art, and Fionn the son of Uail, and the princes of the land were outraged *at* the idea that one who had been placed under their protection should be hurt by any hand.

(James Stephens (1920) Irish Fairy Tales)

e. The generals of the Danes were beaten *at* it, and they were vexed; and Cennedigh was killed on a hill near Fermoy.

(Lady I. A. Gregory (undated) The Kiltartan History Book)

f. Now his bondmen and vassals were grieved *at* this, for they feared the cruelty of the wicked sheriff; they therefore sent messengers to Gamelyn to tell him the ill news, and deprecate his wrath.

(M. I. Ebbutt (1910) Hero-Myths & Legends of the British Race)

g. We confess we are a little shocked *at* the want of refinement in those who are shocked *at* the want of refinement in Hamlet.

(The Best of the World's Classics, Vol. V--Great Britain and Ireland III (Various Authors (1909)))

h. The words Christum adveneror are omitted *at* the desire of the late bishop Atterbury, who thought them not strong enough in regard to Christ; under the whole are the following words,...

(Theophilus Cibber (1753) The Lives of the Poets of Great Britain and Ireland, Vol. III)

i. But they were vexed *at* that, and took away the power, so that he never knew anything again, no more than another.

(William Butler Yeats (undated) The Collected Works in Verse and Prose of William Butler Yeats, Vol. 1)

j. And he was frightened *at* her.

(Sir John Collings Squire (ed.) (1921) Selections from Modern Poets)

受動構文において agent の意味役割を担う前置詞句はその主要部に前置詞の *by* をもつのが無標である。しかしながら前置詞が *by* ではなく *at* のデータも少ないながら存在する。(27)において主要部 *at* とその補部から成る前置詞句がもつ意味役割は、無標である主要部 *by* とその補部から成る前置詞句がもつと同じ agent という意味役割をもっていると仮定する。

このように仮定することにより、第2節で提案した意味役割の変換 (location から agent) の妥当性、および第3節で提案した主語がもつ意味役割の選択についての妥当性も支持することができる。

最後に、以下は Oxford Dictionaries を検索した結果得られたデータである。受動構文に *agent* の意味役割をもつ前置詞が *by* ではなく *at* をとるデータが本節でのアイルランド英語にのみに観察される現象であるのか、それとも広く標準英語にも観察される現象であるかはさらに検証が必要である。

(28)

a. be offended *by*

'I tried to pretend I wasn't offended *by* his remark.'

"She got really offended *by* the suggestion," Colleen said.'

b. be outraged *at / by*

'Many people are outraged *at* the amount of rubbish dumped on the road recently.'

'Around 30 members of the public attended the meeting and were outraged *at* the decision.'

'I was shocked that so many people were so outraged *by* the decision.'

'Many people were justifiably outraged *by* the offensive ad.'

c. be beaten *by*

'She claimed she was beaten repeatedly *by* members of her partner's family and decided to escape from them at the first opportunity.'

'He was tied to a telegraph pole in a field on the outskirts of Cork City where he was repeatedly beaten *by* a gang of up to five men.'

d. be vexed *at / by*

'And his equanimity didn't help matters, especially when she was vexed *at* him.'

'However, many of us were vexed *at* our government and the souring relations with the States.'

'She gets increasingly vexed *by* Les who insists she say particularly silly things over the airwaves.'

'As a social activist, she was vexed *by* the invisibility of significant sections of the community - the homeless, the overweight and the elderly.'

5 まとめ

本論文は、先行研究においてほとんど考察されてこなかった受動文分裂文を取り上げ、アイルランド英語及びアイルランド英語との比較を通してその統語的特徴を分析したものである。

まず第1節において、アイルランド語の受動文とそれに対応するアイルランド英語の2種類の受動文を比較し、2種類の受動文の違いは「視点」という機能的情報を用いることにより説明できることを論じた。

次に第2節において、アイルランド語の受動構文とアイルランド英語の受動構文を関連付ける統語的及び（意味役割を用いた）機能的メカニズム（しくみ）について提案を行った。

そして第3節において、アイルランド英語において *have* - NP<theme> - V-p.p. の連鎖をもつ2種類の構文を比較検討し、その違いは主語がもつ意味役割の違いによるものであることを主張した。

最後に第4節において、アイルランド英語に観察される *ag* + NP とアイルランド英語に観察される *by* + NP の中間の特徴をもつ連鎖 *at* + NP を仮定し、アイルランド英語の文献コーパスを用いてその妥当形を検証した。

注

- 1) Filppula (1999) が提示している以下の例において、主語がもつ意味役割は *agent* でもなく、*location* でもなく、*experiencer* (経験者) であると分析できる。

I have it forgot.
'I have forgotten it.'

参考文献

- Amador-Moreno, Carolina P. 2010. *An Introduction to Irish English*. equinox: London.
 Asián, Anna and James McCullough. 1998. Hiberno-English and the Teaching of Modern and Contemporary Irish Literature in an EFL Context, *Links & Letters* 5:37-60.
 Filppula, Markku. 1999. *The Grammar of Irish English*. London and New York: Routledge.
 Hickey, Raymond. 2007. *Irish English: History and Present-day Forms*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Hickey, Raymond. 2011. Present and Future Horizons for Irish English. *English Today* 106: 3-16.
 Joyce, P. W. 1910. *English as We Speak in Ireland*. London: Longman.
 Milroy, James. and Lesley Milroy. 1993. *Real English: The Grammar of English Dialects in the British Isles*. London: Longman.
 Mudrochová, Aneta. 2017. *Specific Grammatical Features in Irish English*. ms.
 Pietsch, Lucas. (2010) *What Has Changed in Hiberno-English: Constructions and their Role in Contact-induced Change*. ms. University of Hamburg.
 Taniguchi, Jiro. 1972. *A Grammatical Analysis of Artistic Representation of Irish English: With a Brief Discussion of Sounds and Spelling* (Revised and Enlarged Edition). Tokyo: Shinozaki shorin.

(原稿受付 2021.10.7 掲載決定 2021.11.19)